
魔法少女リリカルなのはA ' S VS スーパー戦隊 ヒーロー大決戦

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA VS スーパー戦隊 ヒーロー
大決戦

【Nコード】

N0179X

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

かつて地球を守り続けてきた34のスーパー戦隊。

「レジエンド大戦」と呼ばれる戦いで全ての戦隊は力を失い、その力は宇宙へ散った。

それを集め、宇宙を旅する「赤き海賊団」。

だがある時、35番目の戦隊レッド、ゴーカイレッドに選ばれた「レビン・マーベラス」はオウムロボの「ナビィ」と赤い船「ゴーカイガレオン」と一緒に次元の歪みに飲まれて別の世界へと飛ばされ

てしまう。

注意・死亡戦士が生存してたり、戦いに参加出来無さそうな戦士も参加可能になってます。

OP「海賊戦隊ゴーカイジャー」ED「スーパー戦隊ヒーローゲッター」

(一応リリカルレジエンスの続編(まだ終わっても無いのに)でもありますが、前作を読んで無くても解る内容となっているつもりです)

第1話 『レジェンド大戦』(前書き)

挿入歌「天装戦隊ゴセイジャー」

第1話 『レジェンド大戦』

どこかの荒野、そこでは巨大なロボット「ゴセイグレート」が傷だらけで破損しており、倒れていた。

地上では34番目のスーパー戦隊「天装戦隊ゴセイジャー」が青い怪人「スゴーミン」3体と戦いを繰り広げていた。

「スゴーツー!!」

『うわあああ!!!!?』

ゴセイジャーのメンバー、ゴセイブラック、ゴセイイエロー、ゴセイブルー、ゴセイピンクがスゴーミンに殴り飛ばされ、ゴセイレッドと騎士の様なゴセイナイトはもう1体のスゴーミンの腕のクローから放つ光線が直撃し吹き飛ばされる。

「ぐわああ!!!!?」

「クソツ、なんなんだこのザンギャックって奴等!!」

愚痴を溢すゴセイブラック。

「強すぎる、恐らく史上最強……」

今まで倒してきた悪の組織に比べると、ザンギャックは今まで一番強いかもしれない。

そう考えるゴセイブルー。

だがその時……。

「ニンジャマン見参!!」

「装甲ジーク!!」

「X1マスク!!」

「なみいる悪を白日の下にさらけ出す!! デカブライト!!」

「デカゴールド!!」

「真紅の飛竜、ガオフレイム!!」

「冷徹な剣士、アバレブリザード!!」

スーパー戦隊で一度だけの登場の戦士達とオリジナルの戦士が駆けつけ、スゴミンと戦いだした。

ニンジャマンに至っては199ヒーローではぶられ……。

「はぶられて言うな!!」

「ここは任せろ、お前達は早く、決戦の地へ!!」

「助かります!!」

ゴセイジャーはお礼を言った後、森をくぐって決戦の地へ向かう。

しかし、森の中で下級兵士の「ゴミン」とスゴミンが大量にゴセイジャーの前に立ちはだかった。

「くっ……こんな時に」

ゴセイレッドは唇を噛み締める。

その時……。

「レッドコート……！」

白い縄の様なものがスゴミン達に当たり、電撃が流れる。

『スゴッツ！！？』

『ゴーツ！！？』

ゴセイレッドが後ろを振り向くとそこには赤い戦士、初代スーパー戦隊の「秘密戦隊ゴレンジャー」の「アカレンジャー」が立っていた。

「あなたは初代スーパー戦隊の……！」

ゴセイピンクが言い、アカレンジャーはポーズをとって名乗る。

「アカレンジャー……！」

背後からゴミンがアカレンジャーに襲い掛かる。

「危ない……！」

ゴセイイエローがその事を伝えるが、白い戦士が現れ、ビッグバトンというバトンを振るってゴミン達を叩きつけた。

「『ゴーツ！！？』」

その白い戦士とは「ジャッカー電撃隊」の「ビッグワン」である。

「ビッグワン……！」

「既に33までのスーパー戦隊が揃っている。行くぞ、ゴセイジ

「ヤー!!!」

『はい!!!』

決戦の地へと急ぐゴセイジャーとアカレンジャー、ビッグワン。

しかし、やはりスゴーミン達が邪魔をしてくる。

だが「番外戦士」と呼ばれる「シグナルマン・ポリス・コバーン」

「黒騎士」「デカマスター」「デカスワン」「ウルザードファイヤ

ー」「マジマザー」「大剣士ズバーン」「黒獅子リオ」「獣人メレ」

「姫シンケンレッド」が駆けつけ、スゴーミン達を足止めする。

「アカレンジャー、ビッグワン。ここは我々に任せて先へ!!!」

「俺達が食い止めます!!!」

デカマスターと黒騎士が言い、アカレンジャーは頷きゴセイジャーと共に決戦の地へ急ぐ。

「最初に言っておく!!! 本官もチーキュの為に戦つぞ!!!」

「ズンズン!!!」

シグナルマンはどこかで聞いたような台詞を言いながらズバーンと共に敵に向かって行く。

そして決戦の地へ辿り着いたアカレンジャーとビッグワン、そしてゴセイジャー。

ゴセイジャーを先頭に、アカレンジャーを中心に「秘密戦隊ゴレンジャー」「ジャッカー電撃隊」「バトルフィーバーJ」「電子戦隊デンジマン」「太陽戦隊サンバルカン」「大戦隊ゴーグルファイブ」「科学戦隊ダイナマン」「超電子バイオマン」「電撃戦隊チェンジマン」「超新星フラッシュマン」「光戦隊マスクマン」「超獣戦隊ライブマン」「高速戦隊ターボレンジャー」「地球戦隊ファイブマン」「鳥人戦隊ジェットマン」「恐竜戦隊ジュウレンジャー」「五星戦隊ダイレンジャー」「忍者戦隊カクレンジャー」「超力戦隊オレンジャー」「激走戦隊カーレンジャー」「電磁戦隊メガレンジャー」「星獣戦隊ギンガマン」「救急戦隊ゴーゴーファイブ」「未来戦隊タイムレンジャー」「百獣戦隊ガオレンジャー」「忍風戦隊ハリケンジャー」「爆竜戦隊アバレンジャー」「特捜戦隊デカレンジャー」「魔法戦隊マジレンジャー」「轟轟戦隊ボウケンジャー」「獣拳戦隊ゲキレンジャー」「炎神戦隊ゴーオンジャー」「侍戦隊シンケンジャー」そして「天装戦隊ゴセイジャー」の34までのスーパー戦隊が勢ぞろいした。

「行くぞー!!」

『おうー!!』

アカレンジャーのその声を合図に、栄光の戦士達は宇宙を支配しよ

うとする「宇宙帝国ザンギャック」に戦いを挑んだ。

「ファルコンセイバー!!」

レッドファルコンがファルコンセイバーという剣でゴーミンを切裂き、スゴーミンを縦一閃に切裂く。

「ファルコンブレイク!!」

「スゴーツ!!?」

「ハンマーブレイク!!」

ボウケンブラックがハンマー型の武器でゴーミンを叩きつぶし、リユウレンジャーはスゴーミンに廻り蹴りを炸裂させる。

「はあ!!」

「龍撃剣!!」

「ティラノロッド!!」

龍撃剣、ティラノロッドと呼ばれる武器をスゴーミン2体に叩きつけるティラノレンジャーとアバレッド。

剣型のカクレマル丸、ハヤテ丸でニンジャレッドとハリケンレッドが複数のスゴーミンとゴーミンを切裂き、倒す。

「はああ!!!!」

「超忍法影の舞!!」

レッド以外のカクレンジャー、ハリケンジャー、その仲間のゴウライジャー、シュリケンジャーの前に彰子が現れ、連帯攻撃をゴーミンとスゴーミンに炸裂させる。

「「デヤッ!?!」」

「スゴーツ!?!?」

「ゴーツ!?!?」

チエンジドラゴンに殴りかかるスゴーミンだがチエンジドラゴンは受け流してスゴーミンを蹴りつける。

リュウレンジャー、ゲキレッドといった拳法が得意という共通点がある戦士、レッドターボとレッドレーサーといった車がモチーフの共通点がある戦士が共に戦う。

『はあ!?!』

6人のガオレンジャーが敵へ飛びかかる。

ジェットマンの5人が飛行しながらスゴーミンにぶつかり、吹き飛ばす。

「スゴーツ!?!?」

「ドリルスナイパーカスタム!?!」

「マルチアタックライフル!?!」

シルバーを除いたメガレンジャーが必殺武器でスゴーミン達を撃退。

「トウ!?!」

襲いかかるスゴーミンをアカレンジャーは払いのけて空を見上げる。

するとそこには幾つものザンギヤックの巨大戦艦が宙に浮いていた。

戦艦はスーパー戦隊達を攻撃し始める。

『うわあああ!!!!?』

「みんな!! こうなったら、スーパー戦隊全ての力を結集してこの地球を守るんだ!!」

そのアカレンジャーの言葉を聞き、ゴセイレッドは驚く。

「全ての力を?」

「そうだ。しかし、この手を使えば我々は変身する能力を失う」
「……」

ゴセイレッドは少し考えこんだ後、決意した。

「やります、地球を守るために」

「行くぞ!!!!」

『おう!!!!』

スーパー戦隊達の身体が輝きだし、スーパー戦隊は空へと飛び立った。

そこへデカマスター達、X1マスク達も駆けつける。

「我々も行くこう、全ての家族を守るために……」

全員は頷き、彼等の身体も輝きだす。

「アレ? ニンジャマンは?」

「ニンジャマンは巨大戦に」

シグナルマンの質問にデカマスターが答える。

そして全てのスーパー戦隊の身体が輝き、空へと飛び立ってザンギヤックの戦艦は全てを滅び去った。

しかし、全てのスーパー戦隊は力を失い、その力は宇宙へ散った。

後に、この戦いは「レジェンド大戦」と呼ばれる様になる。

地球からその様子を宇宙から胸に「35」と書かれた赤い戦士「アカレット」が見ていた。

本来ならば、数年後に再びザンギヤックが地球を襲いにくる筈だった。

だがこれは本来とは違うレジェンド大戦の物語、この物語ではレジェンド大戦でザンギヤックは滅び、もう残党くらいしかないので、完全な壊滅も程遠くは無い。

*

時は流れ、なにも無い星に2人の赤い戦士がゴーミンやスゴーミンと戦っていた。

1人はレジェンド大戦を宇宙から見ていた「アカレッド」、もう1人は海賊の様なマスクとスーツの35番目レッド、「ゴーカイレッド」である。

2人はゴーカイサーベルという剣でスゴミンとゴーマンを切裂く。

「決めるぞ、マーベラス!!!」

「ああ!!! 豪快チエンジ!!!」

ゴーカイレッドが携帯の様な「モバイルーツ」を開き、中央辺りの鍵穴に鍵「レンジャーキー」を差し込むとゴーカイレッドは「ハリケンジャー」の「ハリケンレッド」に変身した。

『ハリケンジャー!!!』

レンジャーキーとは、失われたスーパー戦隊の力である。

レンジャーキーを使う事でゴーカイレッドは歴代の戦隊に変身が可能となるのだ。

「ソウル光臨!!! アバレッド!!!」

アカレッドの姿が変わり、ティラノのマスクに赤いスーツの「アバレンジャー」の「アバレッド」に変身し、身体のキザ模様がトゲとなった「アバレモード」となる。

アバレッドはレーザー銃「アバレイザー」を剣にし、構える。

「アバレイザー!!!」

「ハヤテ丸!!!」

ハヤテ丸を抜くハリケンレッド。

「マーベラス!!」

「おう!!」

ハリケンレッドが平らに倒れこんだアバレッドの上に乗り、スゴミンとゴーミンに突っ込んで行く。

「ダブルブレイク!!」

「ゴーツ!!!?」

「スゴーツ!!!?」

スゴーミンとゴーミンを切裂き、2体は爆発した。

その後、変身を解くハリケンレッド。

その正体はまだ幼い少年「レビン・マーベラス」だった。

「すまないな。まだ子供の君に戦わせてしまった」

「構わねえよ、アカレッド。これくらいの事はしねえと、アンタに貰った借り返せねえからよ」

アカレッドはマーベラスに先に赤い船ゴークイガレオンに戻るよう言い、アカレッドはこの星にあるかもしれないレンジャーキーを探しに行った。

「1人で大丈夫かよ?」

「心配するな、マーベラス」

*

赤い船、ゴークイガレオンに戻ったマーベラスはアカレット帰りを待っていた。

『大変大変！！！！』

オウム型のロボット「ナビィ」が突然騒ぎ出す。

「どうした鳥？」

『鳥って言うな！！ それよりマーベラス、大変だよ！！ 巨大な

エネルギーが船に近づいてる！！』

「なに！？」

モニターを映し出すとそこには中央が黒く、周りが赤いブラックホールのようなものが出現。

ゴークイガレオンはその中へ吸い込まれそうになる。

「マーベラス！！ ナビィ！！！！」

丁度近くまで帰ったアカレット、彼はガレオンに向かって走り出す。

(まさかあれは次元の歪み、間に合ってくれ！！！)

それでもアカレッドは間に合わず、ゴーカイガレオンはブラックホール、次元の歪みの中へと消えてしまった。

「クソッ!！」

*

これはある意味「リ・イマジ」のゴーカイジャーの話。

宇宙帝国ザンギャックとの戦いで失われたスーパー戦隊の力、その力を受け継ぐのは……。

とんでも無い奴等となるのだった……。

第1話 『レジェンド大戦』（後書き）

次回

第2話

マーベラス

「へっ、面白いじゃねえか」

ヴィータ

「テメーぶつ潰す！！」

なのは

「えっ！？ スーパー戦隊！！？」

次回「赤き海賊、現る！」

第2話 『赤き海賊、現る!』 (前書き)

なのはがキャラ崩壊起こしてる……。

第2話 『赤き海賊、現る!』

此処はレジェンド大戦が行われた世界とは別の34のスーパー戦隊が活躍した世界。

その為スーパー戦隊は戦う力を失っていない。

そしてここ、宇宙にはびこる犯罪者達と戦い「特捜戦隊デカレンジャー」の基地でもある地球署「デカベース」ではある会議が行われていた。

それは最近、謎の死を迎えるというものだった。

死亡した人達には特に病にかかっている様子も誰かに殺された形跡も無い謎の死。

「今回は俺も、パトロールへ行った方がいかもしれん」

会議が終え、デカレンジャーの一同はパトロールに出ており、そこに犬の顔をしたアヌビス星人「ドギー・クルーガー」が呟く。

「あら、ドギーが自らなんて珍しい」

そこへ白衣を着た女性「白鳥スワン」が現れる。

「あいつ等を信用して無い訳ではないが、俺も動かないといけない気がしてな。 少しでも出てくる」

「ええ、分かったわ」

ドギーもパトロールへ出かける為、デカベースから出て行った。

*

その頃、街のある場所で。

空中で白い服を着た「高町なのは」という少女と赤い服の少女「鉄槌の騎士ヴィータ」が「魔導師」と呼ばれる姿で戦っていた。

「どこの子！？　なんでこんな事するの！！？」

ヴィータは無言でハンマー型のデバイスと呼ばれるアイテム「グラ―フアイゼン」でなのはに攻撃して来る。

なのはは杖型のデバイス「レイジングハート」から桃色の砲撃「デイベインバスター」をヴィータに放つ、しかしヴィータは避けるが、被っていた帽子がその際飛んで行ってしまふ。

「くっ……！！！」

なのはを睨みつけるヴィータ。

「ふえっ！？」

「アイゼン！！　カートリッジロード！！！」

アイゼンの右にトゲらしきものが現れ、その反対方向にブーストがかかり、それを利用しヴィータが回転しながらアイゼンをなのはに叩きつける。

「ラケーテン……ハンマー!!!!!!」

なのははプロテクションというシールドで防ぐが、プロテクションは碎かれ、なのははビルの中にまで吹き飛ばされる。

「きゃああああ!!!?」

因みに、ヴィータが「結界」らしきものを張ってるので人々はこの空間に魔導師以外おらず、その為誰にも被害は出ていない。

魔導師以外は……。

レイジングハートを杖代わりに立つポロボロなのは。

「つつ……」

ヴィータはビルの中へ突入し、なのはにトドメを刺しにかかる。

だが、その時なのはとヴィータの間に次元の歪みが発生。

「なんだッ!!!?」

そして次元の歪みから、マーベラスが出てきて歪みは消える。

「おわああ!!!? イッテゝな。 どこだよここ? んっ?」

マーベラスはヴィータとなのはの存在に気づき、交互に見る。

まずなのは見たマーベラスの思った事。

気弱そう＝ボロボロ＝いじめられた後。

目つき悪い＝ハンマー持つてる＝なのはいじめ。

「成程……、おいお前……」

マーベラスは突然ヴィータを指差す。

「な、なんだよ？」

「いじめとか下らねえ事すんじゃねえええええ！……！」

「「はっ？」」

突然マーベラスの言う事に啞然とするのはとヴィータ。

「なに訳の分かんねえ事言ってんだ！！ 邪魔するなら容赦しねえぞ……！」

アイゼンを構えるヴィータ。

「おいおい、その体格でハンマー持ち上げるってどんだけ腕力あるんだ」

無論、そんなのは魔法が使える者だからこそできる技だ。

ヴィータがアイゼンをマーベラスに振りかざすがマーベラスは避け、

ゴーカイサーベルを取り出しヴィータに振りかざす。

もちろん本気で斬るつもりは無い、寸前で止めるつもりだった。

しかし、ヴィータもプロテクションでとっさにマーベラスの攻撃を防ぐ。

「なに!!!??」

すぐさまマーベラスはヴィータから離れる。

「テメー、普通の人間じゃねえな?」

ヴィータを睨みつけるマーベラス。

「だったらコレで行くぜ!!!」

マーベラスはモバイレッツとゴーカイレッドのレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジ!!!」

『ゴーカイジャー!!!』

マーベラスはゴーカイレッドへと変身。

「ゴーカイレッド、派手に行くぜ!!!」

ゴーカイサーベルと銃型の武器「ゴーカイガン」を取り出し、ヴィータに攻撃を仕掛けるゴーカイレッド。

「オラアー!!」

アイゼンをゴーカイレッドに振りかざすがゴーカイガンでアイゼンを撃ち、軌道を反らしてヴィータにゴーカイサーベルを突きつける。

「ぐっ、この野郎!!」

ヴィータはゴーカイレッドから離れ、距離を置く。

「テメー、舐めてんのか!!?」

「さあな」

ゴーカイガンでヴィータの足元を撃つ。

「おわっ!? 野郎!!」

ヴィータは飛び上がってゴーカイレッドに向かって行くが……。

「豪快チエンジー!!」

腰のバックルから別のレンジャーキーを取り出し、モバイルーツに差し込む。

『オーレンジャー!!』

マスクに のマークがある「オーレンジャー」の「オーレッド」に変身したゴーカイレッド。

「姿が変わった!?!」

「オーレッド!! スターライザー!!」

剣型の武器「スターライザー」を取り出したオーレッド、オーレッドはスターライザーを使いヴィータの攻撃を受け流したりし、さらにレンジャーキーを取り出して豪快チェンジ。

「豪快チェンジー!!」

『ギンガマン!!』

「ギンガレッド!! 炎のたてがみ!!」

「ギンガマン」のギンガレッドに変身したゴーカイレッドは右手から炎をヴィータに放つがヴィータはプロテクションで防ぐ。

(クソッ、ここじゃアタシが不利だ!!)

ヴィータは外へ出て立て直す。

「待ちやがれ!!」

「どつやらお前は空には飛べねえらしいな!!」

「フッ、そいつはどうか?」

ギンガレッドはレンジャーキーとモバイレーツを取り出し、レンジャーキーをモバイレーツに差し込む。

「豪快チェンジー!!」

『ジエートマン!!』

「レッドホークー!!」

「ジエートマン」の「レッドホーク」に変身するギンガレッド、レッドホークは腕から翼を出現させ、ヴィータに向かって行く。

「なんだとツ!?」

なのはは歴代レッド戦士に変身したゴーカイレッドに驚きを隠せないでいた。

とそこへ「PT事件」で親友となった金髪の黒い魔導服を着た「フエイト・テストロッサ」、茶色い髪なのはとフエイトと同じ年くらいの少年「ユーノ・スクライア」、オレンジ色の髪で犬の耳と尻尾がある女性フエイトの使い魔「アルフ」が駆けつけた。

「なのは!!! 大丈夫!?!」

「一体あの2人は……!」

上から順に喋るフエイトとユーノ。

「フエイトちゃん……、ユーノくん、アルフさん。 久しぶり!」

久しぶりに会えた友人たち、その事でなのはは嬉しくて溜まらない、その上……。

「でね、フエイトちゃん達!!! 凄いなだよあの赤い人!!! 歴代のスーパー戦隊に変身出来ちゃうんだ!!!」

「えっ、スーパー戦隊?」

ボロボロなのになぜそこまで元気なのだ?つと言いたくなるくらいテンションが高いなのは。

「オーレンジャーの星野五郎さんが変身してたオーレッド、ギンガマンのリョウマさんが変身してたギンガレッド、そしてジェットマンの天堂竜さんが変身してたレッドホークまで!!!」

「く、詳しいねなのは」

ユーノに至ってはさほど驚いた様子は無い。

なのはがスーパー戦隊に詳しいのは前からなのを知っているから。

「と、取り合えずユーノはここにいて。私とアルフはあの赤い人の「レッドホークだよフェイトちゃん？」レッドホークさんの所まで行くからよろしくね」

「あつ、うん……」

フェイトとアルフが飛行し、レッドホークの元まで駆けつける。

「なんだお前等？」

「あの白い奴の仲間か!!?」

ヴィータの問いにフェイトはこう答える。

「友達だ。民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ。武装解除して投降するなら君に弁護の機会はある」

「誰がするかよ!!」

「おいお前」

レッドホークがフェイトを指差す。

「あ、はい？」

「今俺とこいつのタイムマン勝負だ。邪魔すんな」

「ちよ、ちよつと……!!」

レッドホークはフェイトの制止を聞かずにヴィータに向かって行っ

た。

「フェイト!!」

その時、フェイトに向かって騎士のような格好をした女性「シグナム」が剣型のデバイス「レヴァンティン」を振りかざしてきた。

「あっ!!」

とつさに鎌型のフェイトのデバイス、バルディッシュで攻撃を防いだが、フェイトはなのは達のいるビルとは別のビルまで吹き飛ばされてしまう。

「きゃあああ!!?」

「なんだと? テメー仲間が!」

シグナムはレヴァンティンでレッドホークの背中を斬りつける。

「ぐあああ!!?」

「随分苦戦してるようだなヴィータ」

「うっせー、こっから逆転する所だったんだよ」

「そうか、それはすまない事をした。ほら、修復しておいたぞ」

シグナムはヴィータが被っていた帽子を渡す。

「おう、有難う……」

なのはとユーノはビルの屋上で戦いの様子を見ており、そこに先程斬りつけられたレッドホークが落下してゴーカイレッドに戻っていた。

「あの女……、よくもやりやがったな」

「大丈夫ですか!？」

なのはとユーノがゴーカイレッドに駆けつけ心配をする。

本当になんであれだけやられてなのはは元気なのだろう？

と思うユーノだった。

「ああ、平気だ。お前こそ休んでろ」

「僕も行くから、一応なのはの周りに魔法でバリアを張っとくからその中から出無いでね」

*

一方、フェイトはバルディッシュから金色の光弾「フォトンランサー」をシグナムに放った。

「ファイアツ！」

だがシグナムはレヴァンティンを振るってかき消す。

「そんなッ!？」

「魔導師にしては悪くない。だがベルカの騎士に一对一で挑むに

はまだ早い。 たたっ斬れ、レヴァンティン」

レヴァンティンの刃に炎を宿らせ、フェイトに斬りかかるシグナム。

「ぐっ」

再びバルディッシュで防ぐがまた別のビルに激突し、その中で倒れこんでしまう。

「きゃああああー!!!?」

「フェイトちゃん!!」

一方、フェイトを助けに行きたいオレンジ狼に変身したアルフはシグナム達の仲間の青い狼の「ザフィーラ」に阻まれていたので助けに行く事が出来なかった。

『転移する準備は出来てるんだけど空間結界が破れない。 アルフ、そっちはどう?』

「念話」と呼ばれる魔力を持つ者が使える心と心での会話をユーノがアルフと行っている。

『こっちも色々やってんだけどこの結界硬くってさ!』

フェイトと戦っていたシグナムはレヴァンティンに弾丸のようなものを入れる。

(アレだ。 アレで一時的に魔力をあげてる)

「もう終わりか? ならばじっとしている。 抵抗しなければ命まではとらん」

その言葉にフェイトはシグナムを睨みつける。

「誰がッ!!」

「いい気迫だ。私は古代ベルカの騎士、ヴォルケンリッターの将シグナム。そしてレヴァンティン。お前は？」

「時空管理局囑託……、フェイト・テストロッサ。この子はバルディッシュ」

シグナムはレヴァンティンを構え、フェイトのいるビルに突っ込んで行く。

既にボロボロのフェイトが痛みを堪え、バルディッシュを構え、シグナムがビルに突っ込むと同時にドーンと大きな音と共に煙がたつ。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

フェイトがやられたのか……？

煙が晴れるとそこには……。

サングラスをかけたドギーが剣型の武器「デューソードベガ」でレヴァンティンを受け止めていたのだ。

「なっ、貴様何者!？」

シグナムはドギーから急いで離れる。

ドギーはサングラスを外して投げると警察手帳の様な「マスターライセンス」を取り出し、前にかざし、叫ぶ。

「エマーゼンシー、デカマスター!!」

するとどんどんどギーの姿が変わっていき、最後に犬を思わせるマスクが装着される。

「フェイス・オン!!」

胸には100の文字が刻まれた地獄の番犬「デカマスター」へと、ドギーは変身したのだ。

そして変身が完了すると同時にサンガラスは床へ落ちた。

「百鬼夜行をブツた斬る！！ 地獄の番犬、デカマスター！！！」

第2話 『赤き海賊、現る!』（後書き）

ボスをカッコよく登場させる事が出来たでしょうか？
どうやって結界入ったかは次回語ります。

次々回！

第3話

？

「ムーンライトソニック!!」

デカマスター

「お前は……!!」

ゴークイレッド

「要するにあの空に向かって攻撃すりゃいいんだな？」

フェイト

「これって……」

次回『ダークウルフ・リターン』

第3話 『ダークウルフ・リターン』（前書き）

狼VS狼は出来ませんでした……。

因みに、ゴークイレッド1人ではゴークイオーは使えないので……。

挿入歌「デカマスター NEVER STOP」

第3話 『ダークウルフ・リターン』

「百鬼夜行をブツた斬る！！ 地獄の番犬、デカマスター！！」

なぜ、デカマスターがここにいるのか、それはドギーは結界の影響を受けず、なのはとヴィータの戦闘を目撃していたからだ。

デカマスターへと変身したドギーはディーソードベガを構える。

「ディーソードベガ！！」

「デカ、マスターだと……？」

「最近起こっている殺人事件は貴様等の仕業か？」

「私達は人は殺してはいない」

「そうか、だが、取り調べはさせて貰う」

シグナムもレヴァンティンを構え、どちらも一歩も動かない状況となる。

この時、2人とも同じ事を考えていた。

（（こいつ、強い））

同じ剣士としての勘であろう。

「デヤアッ！！」

「ハアアッ！！」

同時にシグナムとデカマスターが走り出し、レヴァンティンとディーソードベガがぶつかり合う。

シグナムはデカマスターから距離をとるとレヴァンティンに炎を宿してその炎をデカマスターに放つ。

しかし、デカマスターはデイスwordベガを縦一閃に振るい、炎を切裂いた。

「やああ!!」

シグナムがデカマスターに飛びかかる様にレヴァンティンを振り下ろすがデカマスターはデイスwordベガを横に向けて受け止める。

「おりゃあ!!」

シグナムの右横腹に蹴りを叩きこむデカマスター。

そこからデカマスターがだんだんとシグナムを押しに行く。

(あの人、凄い強い)

戦いの様子を見ていたフェイトはそう思い、一方ユーノはヴィータ、アルフはザフィーラと戦っているが苦戦気味だった。

ユーノに至っては元々戦闘向けでは無いので防ぐばかりであり、アルフに至ってはザフィーラの方がパワーやスピードで上回って来るためである。

*

ビルの屋上にいるゴーカイレッドとなのはは。

「要するに、あの空を破壊すればいいんだな？」

「ええ、結界のせいであんな色になってるだけですけど」

「だったら任せな」

だがその時。

「ムーンライトソニック！！」

「ぐわああ！！？」

突然三日月型の刃がゴーカイレッドに飛んできて衝撃で吹き飛ばされるゴーカイレッド。

「そうはさせん」

黒い狼のような姿をした鬼、かつて「百獣戦隊ガオレンジャー」と激しい死闘を繰り広げた「狼鬼」が現れる。

「ええ！？ 狼鬼！！？ なんで！？？」

「ほう、俺を知っているか」

狼鬼の正体は「1000年の邪鬼」と呼ばれる邪悪な力であり、ガオレンジャーのガオシルバーである大神月麿の身体を支配していたのだが、他のガオレンジャーの助けで月麿は解放された。

「俺は誰の身体も使ってはいない」

三日月型の剣、三日月剣を構え、ゴークイレッドに向かって走り出し、素早い動きでゴークイレッドは何度も三日月剣で斬りつける。

「ぐわあああ!!!?」

「ムーンライトソニック!!!」

再びあの三日月の刃がゴークイレッドに飛んでくるが、そこへ緑色の警察を思わせる格好のデカレンジャーの1人「デカグリーン」と黄色い鷲のマスクに黄色いスーツの「ガオイエロー」が現れる。

「イーグルソード!!!」

ガオイエローは剣型の武器イーグルソードでムーンライトソニックを弾き、デカグリーンが「ディーブラスター」という銃で狼鬼を撃つ。

「ぐおお!!!? ほう、ガオイエロー、久しぶりだな」

デカグリーンは「江成仙一」という男性が変身し、ガオイエローは「鷲尾岳」という男性が変身したものであり、デカグリーンとガオイエローも結界の影響を受けないでここへ来れたのだ。

彼等も騒ぎに気付き、ここへ来たのである。

「狼鬼、なんで甦ったか知らねえが、またぶっ倒してやるぜ!!!
プラハ!!!」

イーグルソードで狼鬼に斬りかかるガオイエロー。

「俺も忘れないでよ!」

ディーブラスターで狼鬼を狙撃し、ダメージを与えた所にガオイエローがさらに狼鬼を斬りつける。

「ぬわあ!?!」

狼鬼は高速で動き、三日月剣を振るうがガオイエローのイーグルソードに受け止められた。

「なに!?!」

「あれから何年立ったと思ってんだよ、オラア!?!」

ガオイエローは狼鬼を蹴りつける。

「ぐっ」

「なのは!?!」

そこへフェイトが駆けつける。

「フェイトちゃん……、なんでここに?」

「あの人が、状況は察してるから仲間の所へ行行って」

実はこの時、シグナム達の仲間、緑色の魔導師と思われる格好をした女性「シャマル」がなのはの持つ魔力の源「リンカーコア」を狙っていたのだが……。

「バリアに守られて出無い限り、蒐集は……」

悔しそうな表情をするシャマル。

「俺も見てるだけで終わらねえぞ!?!」

ゴーカイレッドが狼鬼に向い走り出し、デカグリーン、ガオイエロ
ーと共に戦い出す。

「君、新しいスーパー戦隊?」

「さあな!?!」

デカグリーンの問いにゴーカイレッドがそう答えるとゴーカイレッ
ドはゴーカイガンで狼鬼を撃った後、狼鬼の顎にアッパーを繰り出
して殴り飛ばす。

「オラア!?!」

「ぬわあ!?!?」

「豪快チエンジ!?!」

『デ・カレンジャー!』

ゴーカイレッドはデカレンジャーの「デカレッド」に変身し、2つ
の銃「デーマグナム01」「デーマグナム02」を取り出し、
狼鬼を撃ちまくるが狼鬼は三日月剣で防ぐ。

「ええ!?!?」

「デカレッド!?!?」

2人はゴーカイレッドがデカレッドに変身した事に驚くが、まずは
目の前の敵に集中する事にする。

「凄い凄い!!! デカレッドにまで変身した上にデカグリーンさんとガオイエローさんがくるなんて!!!」

ハシャぐなのは。

「ノーブルスラッシュ!!!」

「ストライクアウト!!!」

敵をイーグルソードでX字に切裂く「ノーブルスラッシュ」と強力な弾丸を狼鬼に放ち、大ダメージを与える。

「ぬわああ!!!? おのれえ!!!」

デカレッドは2つのデーマグナムを合体させ「ハイブリッドマグナム」にし、構える。

デカレッドの肩をガオイエローとデカグリーンが手を置き、3人の戦士のエネルギーをハイブリッドマグナムに注入し、引き金を引く。

「ターゲットロック、レジェンドストライクアウト!!!」

「ぬがあああ!!!?」

ガオイエロー、デカグリーン、デカレッドはサムズダウンをする。

「ゴッチュー!!!」

直撃を受けた狼鬼は、倒れ爆発した。

「やったー、すげーい!!!」

なのはがバリアから出てしまい、デカレッド達に駆け寄る。

「な、なのは！！ まだ危ないよ！！」

「えっ？ ああ！！？」

なのはの胸から突然手が出てくる、それはシャルルが魔法でなのはの魔力の蒐集を行っていたのだ。

「蒐集、開始」

「なにしてんだテメー！！」

元の姿に戻ったゴーカイレッドがシャルルを止めようと走り出す、そこに青い身体の鎧の怪人のような「闇のヤイバ」が現れ、ゴーカイレッドを阻んだ。

「なんだテメー！？」

「狼鬼だけじゃなくて、闇のヤイバまで……どうなってんだ？」

背中 of 忍者刀を抜き、ゴーカイサーベルとぶつかり合う。

「邪魔はさせぬぞ。 蒐集は我等にとっても必要な事だからな」

「テメー、あいつの仲間か！？」

「違う、利用しているだけだ」

シャルルは闇のヤイバを不思議に思いながらも蒐集を行う。

フェイトが助けに行こうとするも闇のヤイバが一瞬でフェイトの前に現れ、フェイトを殴りつける。

「きゃあっ！？」

「魔導師を始末する訳にはいかぬが、仕方が無い」

刀をフェイトに向ける闇のヤイバ、デカグリーンとガオイエローが走って行くが……。

「ガガガガーツー!!」

略・なにしてんだこのヤロー!!

突然なんか、こう、背中に羽が生えたゴーグルの帽子を被った白いネズミみたいなのが現れて闇のヤイバの顔面を思いつきり蹴りつけた。

「し、シロンさん!？」

「ガガツ？」

略・大丈夫か？

「あ、はい」

「えっ？ お前そのネズミの言葉がわかんのか？」

「ネズミじゃないです!!」

そして蒐集を完了させたシャマルはなのはの魔力を少しだけ残し、念話でシグナム達にその事を伝える。

「勝負はお預けだ」

「なに？」

シグナムは今の状況ではヤバいと感じ、撤退する事を選んだ。

シグナムは飛行し、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは撤退しようとする。

「奴等の手伝いをしてやるか」

闇のヤイバは種のようなものを取り出し、狼鬼が倒された場所に投げて植える。

「鬼はうち、福は外!!」

すると狼鬼が巨大化して復活、夜の街に立つ。

「うおおお!!!!」

「なに!?!」

闇のヤイバも姿をくらし、ユーノやアルフもシグナム達所ではない。

「なんだいありゃ!?!」

「おもしれえじゃねえか」

モバイレーツを取り出して番号を押すと、ゴーカイガレオンがやってくる。

『ゴーカイガレオン!』

「どうやらガレオンはこの変な空間にこれるみたいだな。いや、元々のこの中に入ったのか」

「船?」

「ワオー」

ゴーカイレッドはゴーカイガレオンに乗り込む。

「ガレオンキャノン!!!」

ゴーカイガレオンが大砲を狼鬼に放つ、だが狼鬼は三日月剣で弾き飛ばし、目からレーザーをガレオンに放つ。

「ぐわあ!?! クソッ、やっぱりガレオンだけじゃダメか。こいつを使うぜ」

そう言ってゴーカイレッドが取り出したのは、ロボットのキーのような「ロボットキー」である。

「ロボットキー、セット、レッツゴー!!!」

ゴーカイレッドは操縦桿の舵の中央にロボットキーを差し込みダイヤルを回すとゴーカイガレオンの全体が輝き、だんだんと姿を変える。

「ビルドアップ、デカレンジャーロボ!!!」

それは「デカレンジャー」の1号ロボ「デカレンジャーロボ」だったのだ。

「デカレンジャーロボだと!?!」

これにはさすがにデカマスターも驚きを隠せなかった。

「あいつ一体何者だ?」

「クレセントウェーブ!!!」

「シグナルキャノン!!」

狼鬼の放ったクレセントウエーブという技を避けたデカレンジャーロボはシグナルキャノンという銃で狼鬼を撃ちまくる。

「ぬおお!!? 調子に乗るな!!」

狼鬼がジャンプして一気にデカレンジャーロボに詰め寄り、三日月剣で何度も斬りつけるが、デカレンジャーロボも剣型の武器ジャツジメントソードを取り出して三日月剣を受け止め、押し返し下右斜めにジャツジメントソードを狼鬼に振るう。

「ぐおおお!!!?」

その際三日月剣を離してしまい、デカレンジャーロボはシグナルキャノンを構える。

「ジャステイスフラッシュャー!!」

シグナルキャノンから強力なエネルギー弾ジャステイスフラッシュャーを狼鬼に放ち、直撃を受けた狼鬼は爆発四散した。

「ぬわあああ!!!?」

その後、一か所に集まっているデカマスター、デカグリーン、ガオイエロー、アルフ、ユーノ、気絶したなのはを抱えてるフェイトの元にゴーカイレッドが戻ってくる。

「お前は一体……」

「俺か? 俺は海賊戦隊ゴーカイジャー……といってもまだ1人だ

が、ゴーカイジャーのゴーカイレッドだ」

*

次々回
第3話。

クロノ

「事情を聞かせて貰うぞ」

吼新星コウ

「し、死ぬ……」

はやて

「頑張っちゃうぞー!!」

ドットパット

「ほう、アレが……」

キバレンジャー

「吼新星!! キバレンジャー!!」

第4話 『キバレンジャーだアア!!』

第3話 『ダークウルフ・リターン』（後書き）

次回はコウの登場ですが、成長してるのでキャラが違ったり、ダイレンジャーは見た事無く調べたりしているので色々間違っている所があればお願いします。

シロンについては前作の最終話で語ります。

第4話 『アバレ戦士とキバレンジャーだアアツ!』 (前書き)

キバレンジャー以外にも……。
タイトル変更しました。

第4話 『アバレ戦士とキバレンジャーだアアツ!!』

数ヶ月前の事、「八神家」と書かれた表札の前に1人の男性と1人の少年が倒れていた。

「ああ、気持ちのいい朝やな」

その八神家から、車椅子に乗った「八神はやて」が扉を開けてでてきた。

「つて……えっ？」

当然はやては目の前に倒れている男性と少年に驚き、目を疑う。

「おいコウ!!! 起きろ!!! 死ぬな!!! 死ぬなああ!!!」

コウ!!!! 凍!!!!」

男性2人の周りには虎みたいな剣「白虎真剣」が宙に浮かび、2人に呼びかけていた。

(なんやあの虎みたいな顔をした剣……)

だがはやては倒れてる2人に車椅子で駆けよる。

「だ、大丈夫ですか!!!?」

「は……」

少年がなにかを言いかけた。

「はっ？」

「腹減った……」

「って腹減ってただけかい!!」

はやてがツツコミを入れた後、青い髪の少年「水月凍すいげつとう」と男性の名前は「コウ」というらしく、はやての作った料理を御馳走して貰った。

「美味しい!!」

「うん、ホントに美味しいですね」

「それで、2人はなんであんな所で倒れてたん？ ていうか何なん？ その剣？」

はやては白虎真剣を見ながら首を傾げてコウに尋ねる。

「ああ、そいつ？」

「俺様は白虎真剣だ!! 聞いて驚くなよ？ いや、やっぱり聞いて驚け!!」

「どつちやの……」

「俺様はコウをスーパ―戦隊の1人、『キバレンジャー』に選んだ者。つまり、世に知れたスーパ―戦隊の1人なんだよコウは!!」

はやてはそれを聞いて「そうなん!？」と驚くと思った白虎真剣だが……。

「うん、知つとたよ？」

「なにい!!？」

「そりゃスーパ―戦隊って有名やもん。あれだけおったら顔を何人かは知ってるで」

確かにそうだ、では、凍は……？

「コイツも戦隊の1人、アバレブリザードなんだよ。最も、彼は『2代目』だけだ」

「2代目」、つまり初代がいたという事だ。

だが初代の話はあまり関係は無いので敢えてスルーする。

「俺は彼と一緒に旅してる中で、世界中を旅してるんだ」

「へえ〜」

「でも、しばらくはこの街にいる」

「コウの言葉にはやては「なんでなん？」と尋ねると……。

「うん、実はね、俺の仲間からの連絡で僕等が倒した筈の敵達が蘇ってるって聞いて……。それでこの街にやってきたんだ」

ここで今まで黙っていた凍が口を開く。

「あの、コウさん。今夜の宿、どうしましょう？ お金も足りないし……」

「ほんならここへ住めばええやん!!」

「えっ……?」

はやての両親は既に他界しており、親戚から贈られる仕送りで生活している。

だがはやては一人っ子でたった1人で家に住んでいるのだ。

そんな話を聞いたら、断る訳にはいかない、スーパー戦隊として、人として一人暮らしの女の子なんて危ないじゃないか……。

そう考え、凍とコウはここへ住む事にした。

「コウさん……」

「うん、じゃあお言葉に甘えて……」

*

その日の午後は、はやての車椅子を押し、コウと凍と一緒に図書館へ行った。

ただ、メガネをかけた異様な人影が自分達をついてきていた事は、コウと凍も気付いていた。

「2人とも暇やろうから好きな所行つといてええよ？」

「いや、この近くにいるよ」

「……あ、あの……俺も……、図書館、行く」

実は凍は少し人見知りであり、コウには完全に心を開いているが、はやてにはまだ完全に心を開けていなかった。

「悪いな、こいつ少し人見知りだから」

「うっん、そういう人はいっぱいおるって」

凍ははやての車椅子を押し、図書館へ入って行った。

「それで、なにしてるんだドットパット？」

「ヒイ！？ 気付かれてた！！？」

実はコウ達を尾行していたのはかつて「恐竜戦隊ジュウレンジャー」と戦った「ドットパット」であった。

しかし、彼は「魔女バンドーラ」と共に封印された筈……。

コウがドットパットを知っていたのはジュウレンジャーとのメンバーとも交流があった為。

というより昔ジュウレンジャーに助けられた事があった為だ、因みに、キバレンジャーは最少年のスーパー戦隊の戦士である。

今は凍だが。

「もしかしてはやてちゃんの血でも吸おうとしたのか？」

ドットパットは前にも少女の血を吸おうと試みた事があり、それを今はやてでまたやろうとしていたのだ。

正し、その少女は結局失敗に終わった。

「な、なぜそれを……!!」

コウはキバスプレッターというプレスにキーホルダーのようなキバエンブレムを挿す。

「気力転身!! キバチエンジャー!!」

コウの姿が、虎のようなマスクに白いスーツ、黒と金のアーマーの「五星戦隊ダイレンジャー」の追加戦士でもある「キバレンジャー」へと変身したのだ。

「吼新星!! キバ……レンジャー!!」

「なっ!? 貴様スーパー戦隊!!」

キバレンジャーは白虎真剣

「人の血を吸おうとする貴様を見逃すわけにはいかねえ!! 行くぜコウ!!」

「っておわああ!!?」

白虎真剣は動ける為、キバレンジャーを引っ張る様にドットパットへ向かって行き、斬りかかる。

「ヒヤアア!!?」

しかし、グリフォンのような黄金の怪人が剣で白虎真剣を受け止めた。

「なに!!? なんだテメー!!?」

「拙者はグリフォォーザー。 貴様を、斬らせて貰う!」
グリフォォーザーはキバレンジャーを押し返し、キバレンジャー斬りつける。

「おわああ!?!」

一方、図書館にいる凍は……。

はやてが手の届かない位置にある本棚の本を取ろうとしているが、中々取れずにいた為、凍が代わりに取るうとしたが、その前に紫の長い髪をした少女「月村すずか」が本をとっていた。

「これかな?」

その後、はやてとすずかは意気投合し、仲良くなり始めた。

コウが心配な凍は外をちらちら見ている。

「あ、あの……は、はやて……ちゃん……」

「なんや?」

「えっと、そのう……」

なにか言いたげだが、3分くらいこの状態が続き、はやてはどこからかハリセンを出して凍の頭を叩いた。

「何時までウジウジしてんねん!」

「いったア!?!?」

当然、周囲から睨まれるがはやては「すみません」
「とすずかも」

緒に謝り、はやては凍を見る。

「言いたい事あんならはつきり言えや。私等もつ、家族やる?」

「……俺が?」

「そや」

「じゃあ……、コウさんの所、行ってきていい?」

ちよつとウルウルした目にときめいたはやて。

「応言つがあのときめきの白眉じゃない。」

「うん、ええよ……/」

凍はコウの元へ向かう。

*

「でりゃああ!」

グリフォーザーの攻撃で吹き飛ばすキバレンジャー!

「うわああ!」

そこへ……、凍が駆けつける。

「凍!?!」

「俺にも、戦わせてください」

キバレンジャーが「はやては!?!」と言つが凍は「大丈夫」と答える。

「はやてちゃんは、今友達といますから」

凍は右腕に装備されたカルノタウルスのようなブレスレット「ダイノコマンダー」を口元に近づけ叫ぶ。

「爆竜チェンジ!?!」

そして凍はカルノタウルスを思わせるマスク、ダークブルーのスーツとアーマーの「アバレブリザード」に変身した。

「氷結の剣士、アバレブリザード!?!」

アバレブリザードは剣型の武器「アイスソード」を取り出し、キバレンジャーと共にグリフォアザーへ向かって行く。

「そりゃ!?!」

まずキバレンジャーが攻撃して来たがグリフォアザーはかわし、次に攻撃して来たアバレブリザードの攻撃も避けてアバレブリザードを蹴り飛ばす。

「ぐあつ!?!」

「白虎一閃!!!」

キバレンジャーと白狐真剣の動きをシンクロさせて、敵に猛スピードで近づき切裂く白虎一閃をグリフォォーザーに炸裂させ、アイスソードから放つ氷の刃「ブリザードベノム」をグリフォォーザーに炸裂させるアバレブリザード。

「ぬわああ!!!?」

「おっのれ!!!」

なんと、本来ならバンドーラがいなくては巨大化出来ない筈のグリフォォーザーが自力で巨大化したのだ。

えっ? ドットパット?

逃げましたけど?

「なに!!!?」

「巨大化した……」

「だったらこっちも……ウオントイガーを……」

だがアバレブリザードが待ったをかける。

「俺がやります、カルノリユータス!!! カスモシールドン!!!」

カルノタウロスとカスモサウルスが超進化した「爆竜」と呼ばれる恐竜「爆竜カルノリユータス」と「爆竜カスモシールドン」が海から姿を現す。

「はあ!!!」

アバレブリザードはカルノリユータスに乗り込む。

「爆竜合体!!!」

カルノリユータスは右腕以外人型に変形し、左腕がドリルで胸がカルノリユータスの顔、カスモシールドが右腕の役割を果たし、カルノリユータスと合体。

「完成、バクレンオー!!!」

アバレンジャーの1号ロボ「アバレンオー」にも似た「バクレンオー」へと合体し、グリフォオーザーに立ち向かう。

「でりゃあ!!!」

剣をバクレンオーに振るうグリフォオーザーだがバクレンオーはシールドともなるカスモシールドの右腕で防ぎ、剣を弾いて左腕のドリルでグリフォオーザーを殴る。

「ぐあつ!!!?」

「一気に終わらせる。爆竜必殺、ブリザードドリルスピン!!!」

バクレンオーのカルノリユータスの口から冷気がグリフォオーザーに放たれ、グリフォオーザーの身体が氷り、バクレンオーが飛び上がったドリルを回転させ、敵に突っ込んで敵を貫く必殺のブリザードドリルスピンをグリフォオーザーに炸裂させ、グリフォオーザーは倒れて爆発した。

「ぬわあああ!!!?」

しかし、グリフォーザーは完全には死んでおらず、別の場所で伸びていた。

*

その夜、コウと凍が泊めてくれるお礼にという事でお勧めの中華料理店へはやて達は行き、ついた店の名前は「赤龍軒」。

「おう、コウ。久しぶりだな！」

そこで働いている「五星戦隊ダイレンジャー」の「リュウレンジャー」である男性「てんかせい天火星”亮”リュウ」と数年ぶりにコウは再会した。

「お久しぶりです、亮さん……」

「ああ、ホントだな」

「おう、コウじゃん」

それともう一人、バイトで働いている「恐竜戦隊ジュウレンジャー」である「トリケラレンジャー」の「ダン」が現れる。

「それにしても、ゴーカイジャーのTV本編出演おめでとうござい
ます亮さん」

とコウがメタ発言する。

「ああ、俺もボウケンジャーがありならダイレンジャーあるんじゃないか？ ジュウレンジャーとジエットマンが出てるならダイレンジャーもTV本編でも出るんじゃないかって思ってたからな」

「2人とも！！ メタ発言！！」

ダンに注意され、その後、コウ達は料理を食べて家に帰ったとさ。

第4話 『アバレ戦士とキバレンジャーだアツ!』 (後書き)

バクレンオー、正義の爆竜に……、でもありだと思っ。
後破壊なんてされてないよー!!

第5話 『復活のネジレ戦士』（前書き）

マーベラスのイメージCDは、グレンラガンのシモンと同じ声です。

挿入歌「鋼の心 ゴーカイシルバー」

第5話 『復活のネジレ戦士』

あれから「時空管理局」つまり、様々な世界を管理し、その世界で起こってる犯罪を取り締まる組織の部隊の1つの戦艦「アースラ」へとフェイト、ユーノ、アルフの場合は戻り、マーベラス、ドギー、岳、仙一通称「セン」も同行、そしてなのはは医務室に運ばれていた。

フェイトはなのはの元へ行き、マーベラス、ドギー、岳、センは「クロノ・ハラオウン」という黒髪の少年に取り調べを受けるらしいのだが、彼の母親の「リンディ・ハラオウン」が止めた。

「母さ……艦長、彼等はロストロギアらしきものを所有してるんですよ!？」

「いえ、それがね……、彼等は前になのはさんから聞いた地球を守り続けてきたスーパー戦隊なのよ」

スーパー戦隊、クロノもその存在をなのはから少し聞いた事がった。

当然クロノはロストロギア扱いになるんじゃないのか？

そういう考えがあつたが……。

「地球には彼等の力が必要なのよ。それに今も地球は何者かに狙われてる。スーパー戦隊の人達はみんな悪人なんかじゃない、なのはさんからもそう聞いたでしょ？」

「目を瞑るんですか……」

「不満？」

「いえ、むしろ逆です」

クロノも堅苦しいイメージがあるが、それでもやはり少年、ヒーローに対する憧れもあるのだろう。

「警察が取り調べ受けるなんて……」

「仕方が無いだろ、セン」

上から順にセンとドギーが喋る。

*

その頃、なのはは……。

「どっ？」

なのは医務室で寝ていた筈、なのにどこか草原のような場所に立っていた。

「私なんてこんな所に、それによく見るとこれ黒獅子のリオさんと獣人メレさんとゲキブルー、ゲキイエローが戦った場所に似てる様な？」

周りには白い柱のようなものがあり、そこでなのはは気付く。

柱にもたれながら銃型の武器「ディフェンダーガン」を右手に持ち左手の甲にコン……コンッと音を立てながら叩いている「未来戦隊タイムレンジャー」の6人目の戦士、深紅の「タイムファイヤー」がいた事に。

「もしかして、た、タイムファイヤーの滝沢直人さん!?!」

今度はなのはの後ろから「恐竜戦隊ジュウレンジャー」の6人目の戦士、緑色のスーツと竜のマスク、金色のアーマーを装着した「ドラゴンレンジャー」が現れた。

「ジュウレンジャーのブライさん!?!」

タイムファイヤーとドラゴンレンジャーは変身を解く。

タイムファイヤーに変身していたのは軍人の服を着た帽子を被った男性「滝沢直人^{たきざわなおと}」とドラゴンレンジャーに変身していたのはファンタジーチックな服装の男性「ブライ」、チェンジペガスとか言っちゃダメだ。

「チェンジペガ……やっぱりブライさんと滝沢さん!?!」

「今チェンジペガサスって言いかけ無かったか? 顔似てるが」

そこはスルーしてだ。

「よく知ってるな俺達のこと」

と滝沢。

「当然ですよ!」

「今日は君に、渡すものがある」

「渡す物?」

なのはの問いにブライが頷くと、マーベラスも所有していないレンジャーキーと端末機のような「ゴークイセルラー」だった。

「これ……」

「子供の君にこんな事を頼むのは無難かもしれないけど、少しでも今回は戦力が欲しいんだ」

「戦力?」

「いづれ分かる」

さつきから滝沢しかなのはの問いに答えて無いが気にしない。

「なんで私何ですか?」

「君はフェイト・テストロッサを必死に救おうとし、正しい心を持った君にこれを使って欲しいんだ」

なのははブライからゴークイセルラーとレンジャーキーを受け取る。

「それから俺達の大いなる力をお前に授ける」

「俺達タイムレンジャー、ジュウレンジャーの」

「えっ? えっ? ジュウレンジャーとタイムレンジャーの大いなる力って?」

なのははその言葉の意味が全く分からず、ブライと滝沢はそれぞれ変身アイテムを取り出す。

「タイムファイヤー!」

「ダイノバツクラー!!」

タイムファイヤーとドラゴンレンジャーにそれぞれ変身。

「ひゃ〜!! タイムファイヤーにドラゴンレンジャーの生変身!

」

「それを使って1番のヒーローになれ」

「じゃあね」

タイムファイヤーとドラゴンレンジャーの身体が輝き、彼等は空へと消えて行った。

「待つて!! まだあなた達に聞きたいことが!!」

タイムファイヤーとドラゴンレンジャーは死亡したという噂があるが、真実かどうかは微妙である。

シュリケンジャーよりかではないが。

*

「…………ふえ?」

目を覚ますとそこは医務室、なのははベッドから起き上がるとその横にフェイトが心配そうになのはの顔を覗き込んでいた。

「なのは、大丈夫!？」

「フェイトちゃん。うん、有難う心配してくれて」

なのははベッドから降りて立ち上がるうとしたが倒れそうになり、それをフェイトが支える。

「有難う、フェイトちゃん」

「ううん」

「フェイトちゃん、怪我、大丈夫？」

先程のシグナムとの戦闘でフェイトは左腕を怪我しており、なのははその心配をした。

「あ、うん」

「ごめんね私のせいで迷惑かけて」

「そんな事無いよ!!」

「助けてくれて有難う、でも折角の再会がこんなで……。 だけど
また会えて嬉しいよ」

「うん、私も嬉しいよ」

なのはとフェイトは久々に会えた喜びで互いに抱きしめた。

とそこへ……。

「おーい、スク水露出女、虐められっ子ホワイト」

空気をブチ壊すかのようにマーベラスが現れた。

「「変な呼び名つけないで!!!？」」

しかしそんな事はお構いなしに、マーベラスは抱き合ってるのはとフェイトを見ると……。

「すまん、スーパー百合タイムの邪魔して」

「百合じゃ無いし私はそんな趣味持ってないから!」

「冗談だ」

とその時……。

「ンガガガッ!! (なに変な目で見てんだコラ!!)」

またみやあの白い羽根の生えたネズミが現れ、マーベラスの顔面を蹴りつけた。

「ぐぼッ!? なにしやがんだこのねずっちょ!!」

「ンガガッ! (誰がねずっちょだ!)」

「ガガガじゃ分かんねえんだよ!!」

取り合えずフェイトが白ネズミを頭の上に乗せ、落ちつかせる。

「シロンさんもマーベラスも落ちついて」

「ガガガ、ガガ(まあ、フェイトがそう言うなら)」

その後、マーベラスが2人を呼びにきたのはリンディが2人を呼んでいた為。

「そういえばマーベラスくんはどうして歴代戦隊レッドに変身できるの?」

「ああ、どうやらここは俺とは違う世界みたいだな」

マーベラスの言葉になのはとフェイトは首を傾げた。

因みに、ドギー、セン、岳は先に地球へ返した。

既にクロノ達には話しているが彼はこの世界の人間では無く、別の世界の人間、しかも「宇宙人」だ。

なぜ歴代レッドに変身出来たかも説明。

そして傷付いたレイジングハートとバルディッシュを修復している部屋にはユーノにクロノ、アルフ、エイミーという女性があり、エイミーが修復作業を行っていた。

クロノの話によるとあのシグナム達が使用していた弾丸は自分のデバイスに入れる事で一時的に魔力を上げるものらしい。

「エイミーさん、レイジングハートとバルディッシュ、大丈夫でしょうか？」

「任せといて、ちゃんと直すから!!」

その後、なのはとフェイトは「ギル・グレアム」という管理局でも上の立場である男性と会う事になり、大切な事を教えて貰った後、リンディからなのはの護衛をかねて海鳴市にフェイト達が住む事になった。

それを聞いたなのはとフェイトは嬉しそうな表情を浮かべる。

「ガガ、ガガガ（よかったな、フェイト）」

「はい!!」

少し気になりマーベラスが「そのネズミと会話できるのか?」と尋ねるとフェイトは「はい」とどこか嬉しそうに答えた。

そして後日、彼女達は海鳴市のなのはの家族が経営している「翠屋」の近くのマンションに引越してきた。

「新形態、子犬フォーム!!」

普段は狼形態になるアルフが子犬の姿になる。

そしてフェレットの姿になったユーノ。

「お前等、その姿なんだ?」

「なのはとフェイトの友達の前だところちの方が都合いいだろ?」

「アルフの言う通り」

マーベラスの質問にアルフとユーノがそう答え、なのはとフェイトは2人で窓の外の風景を眺めていた。

「すごい、近所だ!」

「ホント?」

「うん、ほら、あそこが私の家!」

そこへ、インターホンのチャイムが鳴り、なのはの友人の「アリサ・バニングス」という金髪の少女とすずかが訪ねてきた。

「お邪魔します」

「来たよ〜!」

「アリサちゃん、すずかちゃん!」

すぐに出迎えるのはとフェイト。

ついでに気になったマーベラス。

「ってアンタ誰!？」

「俺? 穴を掘るなら天を突く!! じゃなくてレビン・マーベラスって名前だけど?」

「声ネタ……いや、名前聞いているんじゃない無くてさ」

兎に角マーベラスは放ったらかしにして話を始めるのは達。

「始めまして……って言うのは変かな?」

「ビデオメールで何度も会ってるものね」

実はフェイトは何カ月も地球におらず「PT事件」に関わった者としてずっとなのはやその友人達とビデオメールでやり取りをしていたのだ。

「でも会えて嬉しいよ、アリサ、さすが」

その顔は本当に嬉しそうな表情であった。

「ガガガガ(嬉しそうだな、あいつ)」

そんな事を呟く白ネズミだった。

その後、マーベラス達は近所の挨拶としてなのはの家へ向かう事になったのだが……。

「いや、俺ガレオンで暮らすし……」

「こつちにも都合があるんだ、君もここに住んで貰う」

「はあ！？ クロノ、テメー等の都合なんか知るか！ んなもんお断りだ！！」

だがどの道この辺りに住むのだから挨拶に行つた。

行くメンバーはなのは、フェイト、アリサ、すずか、リンディ、マーベラス、ユーノ、アルフだが……。

マーベラスは何者かの気配を感じる。

「悪い、少し用事を思い出した。先に行つてくれ」

「あ、うん」

少し疑問に思いながらもマーベラスの言う通りにするなのは達。

「こそこそしてんじゃねえよ」

そのマーベラスの言葉と同時に紫色の弱そうな怪人「クネクネ」が1体だけ出現した。

しかも何処からか今度は大量に。

「あん？ なんだこいつ等？」

マーベラス自身、生身では戦闘力が殆ど無い訳では無いが身長差があるのでマーベラスはモバイレーツとレンジャーキーを取り出しモバイレーツに差し込む。

「豪快チエンジー!!」
『ゴークカイジャー!!』

ゴークカイレッドへと変身するマーベラス。

「派手に行くぜ!!」

ゴークカイサーベルとゴークカイガンを取り出しクネクネへと突っ込む
ゴークカイレッドだが、その時「待って!!」という声が聞こえ、ク
ネクネとゴークカイレッドの間になのはが飛びだした。

「なのは、お前……」

「やっぱりこういう事だったんだねマーベラスくん」

「なにしに来た？ お前にデバイスは今無いから戦えないだろ？」

「平気だよ、他に戦う手段ならあるから……！ それに怪我だって
もう大丈夫！」

なのははゴークカイセルラーとレンジャーキーを取り出し、ゴークイ
セルラーにレンジャーキーを入れると1つのボタンを押す。

「豪快チエンジー!!」

『ゴークカイジャー!!』

なのははゴークカイレッドに酷似した銀色の戦士「ゴークカイシルバー」
に変身する。

「真っ赤な太陽背に受けて、青き空に正義は宿る、黄色い歓声浴び
まくり、プニプニほっぺをピンクに染める、緑の若葉のニューヒー
ロー！ ギンギン輝く……その名も、ゴークカイ……シルバー!!」

長い名乗りを終え、ゴーカイスルバーは銃型の武器「ゴーカイスピア・ガンモード」を取り出し、クネクネ達に向かって行く。

「ゴーカイスピア、ガンモード!!」

向かって来るクネクネ達の攻撃を避けながらゴーカイスピアでクネクネを撃ち抜く。

「ゴーカイスピア!!」

そしてゴーカイスピアを槍型のスピアモードの形態にしてクネクネ達を切裂きまくる。

「ギンギンに、行くよ!!」

ジャンプしてゴーカイスピアでクネクネを斬りつけ、背後にいたクネクネに廻し蹴りを炸裂。

「やるな、でも俺の出番なしかよ」

「じゃあ俺が相手になるうか？」

突然そんな声が聞こえ、ゴーカイレッドの背後からスズメバチのような黒い赤い線のある戦士がゴーカイレッドに攻撃を仕掛けたが、ゴーカイレッドは避け、ゴーカイガンでスズメバチの戦士を撃つかわされる。

「テメー、なにもんだ？」

「……ネジレット」

かつて「電磁戦隊メガレンジャー」を苦しめた「ネジレジア」が作

り出した悪の戦隊、「邪電戦隊ネジレンジャー」の1人、「ネジレッド」が現れたのだ。

「ネジレッドだと？　そうか、さっきからこそしてたのはこのザコじゃなくてテメーか」

「ザコ」と言われ怒ったクネクネ達がゴーカイレッドに向かって行くがゴーカイサーベルとゴーカイガンの攻撃であっさり返り討ちにされる。

「闇のヤイバから報告があったが、歴代のレッドに変身出来るらしいな？」

それだけ言うとネジレッドは剣型の武器「ネジセイバー」を取り出し、ゴーカイレッドに向かって行く。

「嘘ッ！？　あれってネジレッド！？」

ネジレッドはネジセイバーでゴーカイレッドに斬りかかったがゴーカイレッドはゴーカイサーベルで防ぎ、ゴーカイガンでネジレッドを撃つがネジレッドは避ける。

ネジレッドは右手から電撃をゴーカイレッドに放ったがゴーカイレッドは飛びあがって攻撃をかわし、ゴーカイサーベルをネジレッドに対して縦に振るうがネジレッドはネジセイバーで防ぎ、ゴーカイレッドの横腹を蹴りつける。

「ぐっ！？　やるじゃねえか」

「貴様もな」

ゴーカイレッドはレンジャーキーを取り出しモバイレッツに差し込む。

「歴代レッドとか言うが、俺が変身出来るのはレッドだけじゃねえぞ。 豪快チエンジ！」

『アーバレンジャー！』

ゴーカイレッドは「爆竜戦隊アバレンジャー」のブラキオサウルスのようなマスクに黒いスーツの「アバレブラック」に変身した。

「無敵の竜人魂！！ アバレブラック！！」

サーベル状の「ダイノスラスター」の先端をネジレッドに向けると炎がネジレッドに放たれる。

「ダイノスラスター、ファイヤーインフェルノ！！」

「ぐわあ！？」

ゴーカイスルバーはゴーカイスピアにゴーカイスルバーのレンジャーキーを差し込む。

『ファイナルウエイブ！』

「ゴーカイ……シューティングスター！！」

ゴーカイスピアをクネクネ達に投げ、ゴーカイスピアにクネクネ達は貫かれ爆発した。

「面白いよ、お前。 また会える日を楽しみにしてるからな」

ネジレッドはどこかへと高くジャンプし、その場を去っていく。

元の姿へと戻るゴーカイレッド。

「なんなんだあいつは？」

*

次々回！

第6話

マーベラス

「なんで俺まで」

健太

「そんじゃ行きますか、インストール！！ メガレンジャー！！」

メガブラック

「メガブラック！！」

『完成！！ スーパーギャラクシーメガ！！』

マーベラス

「お前も一緒に戦いたいんだろ？」

次回『マジでか！？メガ教師！』

第5話 『復活のネジレ戦士』（後書き）

アバレキラーが出無いのは他の回でアバレンジャー全員出すつもりなので……。

そして近い内にロボット中心のバトルがあつたり……？

因みにロボットキーはそう易々とは使えません。

第6話 『マジでか！？ メガ教師！』 (前書き)

挿入歌1 「豪快全開ダツシュ」

挿入歌2 「電磁戦隊メガレンジャー」

第6話 『マジでか！？ メガ教師！』

あれから……。

フェイトがなのは達の通っている学校への転校が決まったのだが、リンディが「マーベラスくんも行ったら？」と言われ、マーベラスは断ろうとしたが半ば強制的に行かされることになった。

転校初日。

「え、えっと……フェイト・テストロッサです／＼よろしくお願ひします／＼」

照れながら自己紹介をするフェイト。

「レビン・マーベラスだ、夢はこの学校の生徒全員と友達になることにしといてくれねーかな？ 面倒くさいから」

『なにその自己紹介！？』

マジなのかボケなのか分からないマーベラスの挨拶にツッコミを入れる生徒達。

「それと、今日から先生しばらく用事ないので、しばらくは変わりの先生が担任をすることになります」

担任の教師がそう言い、教室に1人の男性が入って来る。

「遠藤耕一郎えんとう けいいちろうです。今日からみんなと勉強することになりました」

耕一郎がみんなに自己紹介すると、真つ先に反応するのがなのはな訳で……。

「あー！！ あなたは『電磁戦隊メガレンジャー』の『メガブラック』の『遠藤耕一郎』さん！！」
「えっ？」

すると耕一郎にメガブラックという戦士の面影が一瞬重なった。

なのはがそんなこと言った為に他の生徒達もヒーローがまさかしばらくといえ自分達の担任になるとは思わなかったとみんな嬉しそうにしていた。

「アハハ、俺のこと、知ってるんだ」

耕一郎が苦笑いしながらなのはに言う。

「はい」

その後、休憩時間では……。

マーベラスとフェイトは他の生徒達に質問攻めに合っていた。

「フェイトちゃんとマーベラスくん大人気だね」

苦笑いしながらなのはとアリサに言うすずか。

「えっと、その」

「おい、お前等、いっぺんに質問すんな！」

「そうよ、マーベラスの言う通り。フェイトとか困ってるでしょ

「！」

そこでアリサが助け舟を出した。

「質問は1人ずつ！」

*

その後の体育の時間で、マーベラス達は運動場に来ていた。

「え、今回からしばらくこの俺、『伊達健太^{だてけんた}』が体育教師やるからみんなついて来いよ！」

サムズアップをする男性「伊達健太」。

「ええ！？ 耕一郎さんに続いてメガレンジャーのメガレッドの伊達健太さん！！」

「おっ、なんだ、俺のこと知ってんのか？」

やはり知っていたなのは。

「なのは、本当に詳しいね」

「アレ？ でも健太さん留年してませんでした？」

「いや、あれから何年立ってると思ってんの！？ 流石にもう留年してねーから！」

そんな健太となのはのやり取りの後、生徒はドッジボールをやることになった訳だが……。

「ドッジボールってなんだ？」

マーベラスはドッジボールがなんなのか全く分かっていなかった。

「はいはい、説明してあげるわよ」

アリサがマーベラスにドッジボールのルールを説明し、理解したマーベラスはドッジボールのボールをキャッチすると、なのは目掛けて投げた。

「まずは下手くそな奴狙う！！」

「ふえ！？」

運動が苦手なのはをマーベラスはまず狙い、なのははかわしたがその際転んでしまい膝を怪我してしまった。

「なのは、大丈夫？」

フェイトが心配してなのはに駆け寄る。

「すまねえ、ちよいとムキになりすぎた」

マーベラスもちゃんと謝罪をして、保健室でばんそうこを貼って貰おうと思い、マーベラスとフェイトはなのはを連れて行く。

えっ？普通保健委員だろうって？

保健委員が誰か分からないから気にするな！

保健室には着いて中に入ると白衣を着た男性「なかだいまこと仲代美琴」が椅子に座っていた。

「ええ！？ 『爆竜戦隊アバレンジャー』の『アバレキラー』の仲代美琴さん！！？」

「んっ？ なんだ？」

なんでこうスーパー戦隊の人達がこの学校に集まるのか不思議でならないのはとフェイトとマーベラス。

「なあ、なんでアンタ等スーパー戦隊がなんでこの学校に集まってるんだ？」

「ああ、それはリンディって奴が俺達スーパー戦隊にお前等……高町なのはとフェイト・テストロッサだっけ？ の護衛を頼まれたんだよ」

ここで思う、「リンディはスーパー戦隊全員と知り合いなのではないだろうか」と……。

「でも仲代さんはそんなガラな気がしないんですけど」

となのが言うと……。

「最近暇でな、全然ときめかねーんだ。だからこれは新しい挑戦みたいなもんかね？」

*

次の時間では「交通安全教室」という交通安全の勉強をする為生徒全員は運動場へと出ていた。

「という訳で、信号は青になってから手を上げて渡るう！」

なんだか身体に信号機みたいなものがついた「シグナルマン・ポリス・コバーン」がそんなことを「救急戦隊ゴーゴーファイブ」の「ゴイエロー」こと「たつみだいもん巽大門」がしていたり。

当然なのはがキヤーキヤー騒いでいた。

「手、上げて渡るんだな？」

と言いながら両手を上げるマーベラス。

「片手でいいのよ」

とアリサにツッコまれ、ぶっきらぼうに「分かってるよ」「とかやっているマーベラス。」

その頃、校舎の屋上でこの様子を見ていたネジレットとネジレットに酷似した4人「ネジブラック」「ネジブルー」「ネジイエロー」「ネジピンク」が見ていた。

「まさかメガブラックとメガレッドがいるとはな」

「好都合、ここにいる奴等全員殺してそいつ等も殺せば、僕達の作戦もより早く実行に移せる。」

上から順にネジブラックとネジブルーが喋り、5人は屋上から飛び降り地上へと着地する。

ネジレンジャーの登場に当然生徒も教師も驚きを叫びをあげる。

「あいつ、ネジレッド!! こんな所に来やがって!」

ゴーカイレッドに変身しようとするマーベラスだがなのはが止める。

「ここじゃ一目について余計混乱招いちゃうよ! 隠れて変身しよう!」

「ああ」

マーベラスとなのはがどこかへ去って行くのをみたフェイトは気になり2人を追い掛ける。

シグナルマンと大門、さらに外へ出て交通安全教室を見ていた健太と耕一郎はみんなを非難させる。

「まさかテメー等が現れるとはな!! 行くぜ耕一郎!!」

「ああ!!」

健太と耕一郎は腕にあるプレス、「デジタイザー」の数字のボタンを押す。

「『インストール!! メガレンジャー!!』」

『スリー・スリー・ファイブ』

健太は「電磁戦隊メガレンジャー」の「メガレッド」、耕一郎は同じくメガレンジャーの「メガブラック」に変身を完了させる。

「着装！！」

大門は腕にある装備「ゴーゴブレス」のあるボタンを押し、「救急戦隊ゴーゴーフアイブ」の「ゴイエロー」に変身。

「ほう、メガレンジャー以外の戦士……」

「メガレンジャー以外の戦士が相手だと、お前等も苦戦するだろ！！」

メガレッドはそう言った後、先にドリルがついた剣「ドリルセイバー」を取り出す。

「ドリルセイバー！！」

「クネクネ！！」

ネジイエローが声をあげるとクネクネ達が出現。

「行くぞお！！」

ゴイエローの合図で彼を含めるシグナルマン、メガレッド、メガブラックはネジレンジャーに向かって行く。

*

その頃、マーベラスとなのははモバイレーツとゴークアイスルラーを取り出し、レンジャーキーをセットしてそれぞれ変身する。

「「豪快チェンジー!!」」

『ゴークアイジヤー!!』

マーベラスはゴークイレッド、なのははゴークイシルバーに変身。

「なのは!!!?」

だがその変身する所をフェイトに見られた。

「ふえ、フェイトちゃん……」

「な、なんでなのはが……」

ゴークイシルバーはフェイトに事情を手短に話した。

「そう、戦うの?」

「うん、そうしないと、私を選んでくれた直人さんとブライさんの為にも」

「……」

しかし、フェイトはあまりよく思っていない様子。

「だったらお前も一緒に戦うか?」

「えっ?」

ゴーカイレッドのその言葉に戸惑うフェイト。

「お前はなのはを、友達の助けをしたい。だが今は戦う力が無い。そうだろ？ だったら俺が魔法以外の力をお前に貸してやる」

そう言ってゴーカイレッドはフェイトにある物を渡す。

それは「モバイレッツ」と黄色のゴーカイジャーのレンジャーキー。

「どうする？」

「……私、やります！！ 豪快チェンジ！！」

フェイトはモバイレッツにレンジャーキーを差し込み、「海賊戦隊ゴーカイジャー」の黄色の戦士「ゴーカイイエロー」に変身したのだ。

「変身出来た！」

「行くぞ、お前等！」

「うんー！！」

*

「ブイランサーー！！」

薙刀状の武器「ブイランサー」を取りだしたゴーカイイエローはクネクネ達の攻撃を避けてクネクネ達を切裂く。

「シグナイザー!!!」

拳銃型の「シグナイザー・ガンモード」で周りを囲んでいるクネクネ達を一気に撃ち抜く。

「おりゃあ!!!」

ドリルセイバーでネジレットに斬りかかるメガレットだがネジレットはネジセイバーで受け止める。

「なんの!!! オラオラオラ!!!」

メガレットはドリルセイバーの猛攻をネジレットに浴びせ、ネジレットは防ぐ一方。

「ぐっ!?!? 腕を上げたなメガレット!」

「ネジアロー!!!」

弓矢型のネジアローから矢をメガレットの背中に放つネジピンク。

「ぐあっ!?!?」

「ネジピンク、邪魔をするな!!!」

「うっさいなあ、倒せばいいんでしょうが」

相変わらずコンビネーションは悪い様だ。

「メガブルーがないのは残念だけど……」

「メガレット!!!」

先が三日月型の棒状の武器「メガロッド」をネジブルーに振るうが片手で受け止められ、ネジブルーは右手から青い電撃をメガブラックに放つ。

「ぐわああ!!?」

「チツ、俺の獲物を……。まあ仕方ないか」

ネジブラックは舌打ちするがネジイエローと共にメガブラックに飛び蹴りを喰らわせる。

「おわあ!?!」

ネジレンジャーのレッド以外の4人はそれぞれの専用武器を合体させたライフル型の武器「ネジレアタックライフル」を構え、ネジレッドは銃型の武器「ネジレーザー」とネジセイバーを合体させた「ネジセイバーカスタム」を構える。

「ネジセイバーカスタム!!」

「ネジレアタックライフル!!」

「あいつ等俺達の必殺武器の真似を……。!!」

ネジレンジャーがメガレッドとメガブラックを撃とうとした時……。

ネジレンジャーはゴークライジャーの銃撃を喰らった。

『おわああ!!?!?』

「君達は……。!!」

「ゴークイレッド」

「ゴークイエロー」

「ゴークイ……。シルバー!!」

ゴークイレッド、ゴークイエロー、ゴークシルバーが名乗りを上げる。

「海賊戦隊！！」

『ゴークイジャー！！』

「助けに来ました！！」

ゴークイシルバーが言い、ゴークイレッドは新たなレンジャーキーを取り出す。

「こいつで行くぞ」

『豪快チェンジー！！』

『ターボレンジャー！！』

「高速戦隊ターボレンジャー」に変身したゴークイジャー。

ゴークイレッドは「レッドターボ」、ゴークイエローは「イエローターボ」、ゴークイシルバーは「ブラックターボ」の戦士に変身。

「派手に行くぜ！！」

「ギンギンに行くよ！！」

「えっと……私だけ特にない！！」

レッドターボ、イエローターボ、ブラックターボは高速スピードでネジレンジャー達を跳ね飛ばす。

『うわああ！！？』

「続いてこれ行こう！！」

イエローターボの提案で新しいレンジャーキーを取り出すターボレンジャー。

『豪快チエンジー!!』

『メーガレンジャー!!』

ゴーカイレッドはメガレンジャーのメガブルー、ゴーカイイエローはメガイエロー、ゴーカシルバーはメガピンクに変身した。

「えっ!? 嘘オ!?!」

「メガレンジャーに変身した!?!」

クネクネと戦っていたゴーイエローとシグナルマンも驚きは隠せない。

「まさか他の戦隊になるとは……」

「本官もびつくりだ!!」

メガブルーはメガレッドの方を振り向く。

「反撃開始と行こうぜ?」

「おっしゃ! なんかよく分かんねえけど!!」

メガレンジャーが並び立ち、それぞれ名乗りを上げる。

「メガレッド!!」

「メガブラック!!」

「メガブルー!!」

「メガイエロー!!」

「メガピンク!!」

「電磁戦隊!!」
『メガレンジャー!!』

メガレンジャーはそれぞれ専用武器を取り出し、ネジレンジャーに走って行く。

「ドリルセイバー!!」
「くっ!!」

ネジセイバーとドリルセイバーをぶつかりあわせるメガレッドとネジレッド。

「オリヤア!!」

だがメガレッドはネジセイバーを弾き返し、ドリルセイバーでネジレッドは斬りつける。

「ぐわあ!!?」
「バトルライザー!!」

左手首に「バトルライザー」というブレスが出現し、1のボタンを押すと左手が光り、ライザーチョップとライザーパンチという技をネジレッドに炸裂させる。

「ライザーパンチ!!　ライザーチョップ!!」
「うわああ!!?」

ネジブルーとメガブルーはそれぞれの斧型の武器「ネジトマホーク」と「メガトマホーク」を取りだして互角の戦いを繰り広げていた。

「本人でないと見え、メガブルー覚悟!!」
「そつちがな!!」

ネジトマホークを振るうネジブルーだがメガブルーはジャンプしてネジブルーの背後に回り込み、高速回転して敵を切り刻む「トマホークハリケーン」をネジブルーに炸裂させる。

「トマホークハリケーン!!」
「うわあ!!?」

メガブラックとネジブラックは押し合いとなる。

「うおおおお!!!!」
「な、なに!？」

だがメガブラックの方がパワーが上だった為、持ち上げられて地面へと叩きつけられるネジブラック。

「がはあ!？」

メガイエローとメガピンク、ネジイエローとネジピンクは2対2で戦っており、ネジアローから矢をメガピンクに放つが銃型の武器「メガスナイパー」で矢を撃ち落とすメガイエローとメガピンク。

「メガスナイパー!!!!」
「なに!？」

「邪魔だ、私がやる!!」

ネジピンクを押し退かし、ネジイエローはメガイエローとメガピンクに向かい走って行く。

「コンビネーション悪そう」

「じゃあ見せてあげようフェイトちゃん、私達のコンビネーション」

メガピンクの肩を踏み台に高くジャンプして飛び蹴りをネジイエローに決めるメガイエロー。

「ぐはっ!?!」

「やはり私がやる!?!」

「黙れ、貴様は足手まといになるだけだ!?!」

「なんだと!?!」

遂には喧嘩を始めたネジイエローとネジピンク。

「スリングスナイパー!?!」

「キャプチャースナイパー!?!」

メガスナイパーとメガスリングというメガイエローの武器を合体させた「スリングスナイパー」とメガスナイパーとメガキャプチャーを合体させた「キャプチャースナイパー」を構えるメガイエローとメガピンク。

超音波と強力な追尾光弾をネジイエローとネジピンクに放ち、大ダメージを与えた。

「ぐわああ!?!?!」

「トドメだ!?!」

レッド以外のメガレンジャーの専用武器を合体させたライフル型の

武器「マルチアタックライフル」を構えるメガブラックとそれを支えるメガブルー、イエロー、ピンク。

メガレッドはドリルセイバーとメガスナイパーを合体させた「ドリルスナイパーカスタム」を構える。

「ドリルスナイパーカスタム!!」

「マルチアタックライフル!!」

「「シユート!!」」

強力なエネルギー弾を一か所に集まったネジレンジャーに放ち、ネジレンジャー達は爆発を起こす。

『ぐわあああ!!!!!!?』

「いつよしゃ、やったぜ!!」

メガレッドはネジレンジャーを倒したと思ったが、まだネジレンジャー生きており、5人のネジレンジャーは立ち上がる。

「なに!?!」

「貴様等に見せてやる、邪電合体!!」

ネジレンジャーの5人が融合し、巨大なロボのようなものに変化した。

「あれは、ギヤラクシーメガ!?!」

それはメガレンジャーの1号ロボ、「ギヤラクシーメガ」に酷似していたが、所々生物のような箇所が見られ、全身が黒かった。

『完成！！ ギャラクシーネジレ！！』

その黒いロボ、『ギャラクシーネジレ』はメガレット達を見降ろす。

*

次回予告。

メガレット

「みんなどうだった！？ 俺達メガレンジャーの活躍！！」

ゴークイレッド

「ブルー、イエロー、ピンクは俺達だろうが。 そんなことより次

回は！！」

メガレット

「ギャラクシーネジレの攻撃の前にロボット達も大苦戦！！」

ゴークイレッド

「今こそスーパー戦隊の力を合わせる時！」

メガレット

「次回『リリカルなのはA'S VS スーパー戦隊』！！
『激
ヤバ！？ 超ロボットバトル！！』次回も……！！」

ゴークイレッド

「また見てくれよ」

メガレッド

「おい、俺が喋ってる途中！？」

第6話 『マジでか！？ メガ教師！』（後書き）

ネジレンジャーが弱く見えるのはすぐにコンビネーションが悪いのを見破られた為。

本当の力はギャラクシーネジレ。

仲代先生はみんなが避難した所を護衛してる為この戦いには参加してません。

第7話 『激ヤバ!? 超ロボットバトル!』 (前書き)

ロボットバトル中心の話に……。

挿入歌「電磁戦隊メガレンジャー」

ED「気のせいかな」

第7話 『激ヤバ!? 超ロボットバトル!』

ギヤラクシーネジレとなり、破壊活動を行い始める。

「どうするよ? 2人だけじゃギヤラクシーメガを呼んでも本来の力を発揮出来ねえぞ!？」

メガレッドの言葉にゴーカイレッドは「手はある」と答える。

「ド派手に行くぜ!!」

モバイレーツの数字を押して行き、ガレオンを呼びだすゴーカイレッド。

『ゴーカイガレオン!』

ゴーカイガレオンが現れる。

「うおー、スゲー!! 船が空飛んでるぜ耕一郎!」

「分かったから落ち付け!」

ハシャいでるメガレッドをメガブラックは落ちつかせ、ゴーカイシルバーはタイムレンジャーの大いなる力、ゴーカイイエローは5つある内の1つ、ガレオンに収納されたゴーカイマシンに乗り込もうとするがゴーカイレッドが止める。

「此処は俺が1人でやる。扱いとかが難しいしな。それに女をこんな所まで付き合わせるつもりはねえ!!」

ガレオンに乗り込んだゴークイレッドはロボットキーを舵のダイヤルに廻すと巨大な宇宙ステーションに変わり、そのまま人型となりメガレンジャーの1号ロボ、「ギヤラクシーメガ」へとガレオンは変化した。

「完成！！ ギヤラクシーメガ！！」

「「ギヤラクシーメガ！！？」」

当然メガレットとメガブラックは驚き、メガブラックはゴークイイエローになぜこんな事がと尋ねる。

「実はマーベラスはこの世界の人間でなければ……地球人でも無いんです」

「なに……？」

「どういうことだよそれ！？」

ゴークイシルバーはなんだか嬉しそうにしていた。

「ギヤラクシーメガだ！！ マーベラスくん空気呼んでる」

ゴークイイエローはマーベラスの事を説明し、当の本人はギヤラクシーメガを操縦してギヤラクシーネジレに向かってゆく。

「喰らえ！」

ギヤラクシーメガはギヤラクシーネジレを殴りつけ、対するギヤラクシーネジレもギヤラクシーメガに殴り返す。

「なんのぉ！」

「ぐわあ！！！！？」

ギヤラクシーネジレは胸部から赤い火球を放ち、ギヤラクシーメガに直撃させる。

「ぐわあああ!!? だったらこっちはこいつで行くぜ! ブースターライフル!!」

銃型の武器「ブースターライフル」をギヤラクシーメガは取り出し、レーザー光線をギヤラクシーネジレに発射するが……。

「そんな物が効いてたまるかあ!」

ギヤラクシーネジレはなんと、巨大化したネジレンジャー5人に分離してしまったのだ。

「ネジセイバー!!」

「ネジロッド!!」

ネジレッドのネジセイバー、ネジブラックのネジロッドでギヤラクシーメガは斬りつけられ、さらに残りのネジレンジャーのメンバー達からの総攻撃を受けた後、ネジレンジャー達は目から青い光線をギヤラクシーメガに放つ。

「ぐわあああ!!?」

ロボットキーは1度の戦闘に付き、1度しか使えない。

その為戦略を変えて別のロボットになる事は出来ないのだ。

「分離した!?!」

「バカな……、大門、本館も戦いに行つて来る！」

シグナルマンがゴイエローにそう伝え、ゴイエローは頷いた後シグナルマンが巨大なパトカー「サイレンダー」に乗ってギャラクシーメガの助太刀にやってきた。

「助太刀に来たぞ、ゴークイレッド！ スタンドアップ・サイレンダー！！！」

サイレンダーが人型のロボに変形し、サイレンダーはロボ形態となる。

「すごい！！ サイレンダーとギャラクシーメガのドリームマツチだあ！！！」

やはり嬉しいがるゴークイレッド。

「無駄な抵抗はやめ……」「ネジスナイパー！！」「ぐわああ！！！！？」

シグナルマンが台詞の途中でネジスナイパーにサイレンダーを撃たれて最後まで言えなかったシグナルマン。

「貴様！ 本官が喋ってる途中で……」「ネジアロー！！」「ぬおおお！！！！？」

今度は背後からネジピンクがネジアローで光の矢をサイレンダーに放ってきた。

「だ・か・ら！ 本官が喋ってる途中……」「ネジロッドパワープレ

スー!!」

今度はネジブラックがネジロットでサイレンダーに突きを喰らわせてきたが、サイレンダーはネジロットは受け止めてネジブルーの方へと投げ飛ばす。

「何度も同じ手が通用すると思うなよ！」

「ぐわああ!!?」

「最初に言っておく！ 本官はかーなり強い!!」

ネジブラックはネジブルーへと投げ飛ばされた為激突し、喧嘩が始まる。

「なにしてんだよお前！」

「それはこつちの台詞だ!!」

「メガサーベル!!」

ネジブラックとブルーは争っている隙を突き、ギャラクシーメガは剣型の武器「メガサーベル」でネジブルーとネジブラックは切れき、サイレンダーは飛びかかってきたネジイエローは受け流し、胸から放つ光線「シグナルフラッシュ」をネジイエローに発射。

「ギヤアア!!!?!」

だがそこでネジレンジャーは再びギャラクシーネジレに戻り、ネジスナイパーカスタムとネジマルチアタックライフルを構える。

サイレンダーとギャラクシーメガは身構える。

「ネジスナイパーカスタム!! ！ ネジマルチアタックライフル!!」

ダブルシュート!!」

「ぐわああああ!!!!?」

2つの武器が放ったエネルギー弾がサイレンダーとギャラクシメ
ガに直撃し、2体は倒れこむ。

「カタカナ多いって!!」

ゴーカイレッドは力を振り絞り、舵を握ってギャラクシメガを立
たせる。

「マーベラス!!」

ゴーカイエローがゴーカイレッドに向かい話しかける。

「んっ?」

「マーベラスは私達のこと、認めてくれたんだよね? 仲間として
?」

マーベラスがなのはとフェイトをゴーカイジャーを含めた理由……
それは戦う意思のこもった強い瞳が2人にあつたからだ、それをマ
ーベラスは気に入った。

「だつたらなんだよ?」

「だつたら、もっと仲間を頼ってください!! 私達も、戦います
!!」

次にゴーカイシルバーがゴーカイレッドに言い、セルラーにタイム
ファイヤーのレンジャーキーを入れる。

実は、既に追加戦士と番外戦士のレンジャーキーは全てマーベラスとアカレッドの手によって集められており、全スーパー戦隊のレンジャーキーは既に集まっているのだ。

「ああ、確かに……。フェイトは今この状態じゃ乗り込むことは出来ねえが、頼む、俺に力を貸せ!!」

ゴークアイエローとシルバーは頷き、ゴークイシルバーはタイムフアイヤーの顔が描かれたセルラーのボタンを3回押す。

「来て! タイムレンジャーの大いなる力!!」

『発進! 豪獣ドリル!』

先端にドリルがある戦艦が未来都市より発進し、タイムスリップして現代に辿り着く。

ゴークイシルバーは豪獣ドリルに乗り込む。

「わあ、凄いよ! 乗った直後に使い方が頭の中に入って来て動かし方が分かる!」

ゴークイシルバーはロボットキーを1つだし、舵の中央のダイヤルに差し込む。

すると豪獣ドリルの姿が変わり、メガレンジャーの3号ロボ、「メガボーイジャー」となる。

「完成!! メガボーイジャー!!」

「健太、デルタメガを!」

メガブラックは何かを呼ぶようにメガレットに言い、メガレットは「えっ?」となる。

「呼べるかなあ? アレから何年も立ってるし……でもいつちよやるか! デルタメガ! インストール!」

バトルライザーと呼ばれるブレスレット型の装備に音声入力を行うと空から黒いメカが現れ、変形し自動で動く人型のメカ、「デルタメガ」が現れた。

「ガトリングブラスター!!」

デルタメガは両腕のガトリング砲から銃弾をギヤラクシーネジレに放つ。

「ネジレシールド!!」

ギヤラクシーネジレは盾の「ネジレシールド」で攻撃を防ぐ。

飛びあがり、飛び蹴りをギヤラクシーネジレに炸裂するメガボイジャーだがギヤラクシーネジレは体中から衝撃波を放ち、メガボイジャー、ギヤラクシーメガ、デルタメガ、サイレンダーを吹き飛ばす。

『うわあああ!!?』

「ゴークイレッド!! デルタメガと合体しろ!!」

「合体!? 分かったぜ先生よお! 超電磁合体!!」

ギヤラクシーメガとデルタメガは宇宙まで飛んで行き、2体は宇宙で合体し、「スーパーギヤラクシーメガ」となる。

「完成！！ スーパーギャラクシーメガ！！」

地球へと戻って来てサイレンダーとメガボイジャーと共にギャラクシーネジレに向かってゆく。

一斉に攻撃を行うがギャラクシーネジレの戦闘力は高く、剣型の武器「ネジレサーベル」を使い3体のロボを斬りつける。

メガボイジャーはロケット型の武器を手にし、先端からミサイルを発射する「ボイジャースパルタン」をギャラクシーネジレに放つ。

「ボイジャースパルタン！！」

「ぐおおお！！？」

隙を突いた為、大ダメージを与えることに成功し、そこを突いてサイレンダーは右手の機関砲から一斉掃射の必殺技「サイレンバルカン」をギャラクシーネジレに喰らわせた。

「サイレンバルカン！！」

「ぐううう！！！！？」

「次はこいつだ！！ スーパーギャラクシーナックル！！」

Sギャラクシーメガの両腕がロケットパンチの様に飛び、それがギャラクシーネジレの身体を貫く。

「ぬわあああ！！！！？」

「こいつでトドメだ！！」

Sギャラクシーメガは身体が炎に包まれ、高速回転して敵に突っ込む必殺技「ビッグバンアタック」をギャラクシーネジレに繰り出す。

「こいつでゲームオーバーだ!! ビッグバンアタック!!」
「うわああああ!!!?」

ギヤラクシーネジレはネジレンジャーに分離し、それぞれが爆発して消滅した。

「いよつし!!」
「んっ?」

そこでゴーカイレッドはゴーカイイエローの背後にまだ生きていた等身大のネジレッドがいたことに気付く。

「あいつ!!」

すぐにメガボイジャーから飛び降り、他のメンバー達がネジレッドに気付いた時にはネジセイバーをゴーカイイエローに振り下ろした。

「フェイトちゃん!!」
「させるか!!」

ゴーカイイエローを庇い、ネジセイバーで斬りつけられるゴーカイレッド。

「ぐわあああ!!!?」
「マーベラス!!!」

ゴーカイレッドは倒れこみ、変身が解ける。

ゴーカイイエローは変身を解除してマーベラスを抱きかかえる。

「ネジレッド!!」

「貴様等あ……!!」

メガレッドはドリルセイバーを構える。

「ネジレッド、お前とは俺が決着をつけてやるぜ!」

「フン、面白い!」

ネジセイバーとドリルセイバーがぶつかり合い、メガレッドはネジレッドから離れてメガスナイパーでネジレッドを撃つ。

「ぐおおお!!?」

「うおおお!!」

メガレッドがネジレッドに向かい走って来るがネジレッドは高くジャンプしてメガレッドの背後に回り込みネジセイバーでメガレッドの背中を斬る。

「ぬわあ!?!」

互いに距離を取り、ドリルスナイパーカスタムとネジスナイパーカスタムを構える。

「シユート!!」

互いの必殺技のエネルギー弾がぶつかり合い、そして……。

メガレッドのエネルギー弾が打ち勝ち、ネジレッドに直撃、ネジレッドは倒れて爆発を起こした。

「ぐわああああー!!!?!?」

*

マーベラスは保健室に連れて行き、ベッドの上で眠っていた。

「まあ、大した事ねえし、少し眠れば何時も通りになるだろ」

美琴の言葉を聞いてなのはとフェイトは「ほっ」としていた。

「おーっし、じゃあマーベラスが目を覚ましたらみんなで焼き肉食
いに行こうぜ!」

「いいですね!」

健太の提案になのはが賛同する。

「じゃっ、健太先生の奢りでな!」

大門がからかう様に言うと健太は「なんでっただよお〜?!?」と泣き
面になっていた。

*

次々回！

コウ

「守護騎士か何か知らないけど人の家に勝手に入るなよ！」

闇のヤイバ

「トリノイドを復活させる」

マーベラス

「お前も一緒に派手に暴れるぞ！！」

「豪快チェンジ！！」

『爆竜戦隊！！ アバレンジャー！！』

次回『アバレまくれ青い海賊剣士』

ゴーカイブルー

「派手に行かせて貰う！！」

第7話 『激ヤバ!? 超ロボットバトル!』 (後書き)

絞めはやっぱり焼き肉でこそメガレンジャーだと思う(キリッ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0179x/>

魔法少女リリカルなのはA'S VS スーパー戦隊 ヒーロー大決戦

2011年11月20日20時06分発行